ISSN 2758-0784

MUSEUM
THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter No. 63

March 2025

京都大学総合博物館ニュースレター



館蔵『山城国吉田村古図』（18 世紀後葉～ 19 世紀初頭ごろ）上が北、天地 175.8cm ×左右 265.0cm（2 頁に関連記事）

文化財発掘 XI 吉田遺産探訪 －遺跡・古図・剣鉾－ 2
第 164 回 レクチャーシリーズ（特別版）..... 3
総合博物館コレクション研究〈23〉..... 4
総合博物館でのインターン..... 6
子ども博物館だより〈7〉..... 8
研究資源アーカイブ通信〈32〉..... 9
総合博物館日誌（2024 年 11 月～ 2025 年 2 月）..... 10

2024 年度特別展

文化財発掘 XI 吉田遺産探訪
―遺跡・古図・剣鉾―

開催期間：2025 年 3 月 19 日（水）～ 5 月 11 日（日）

吉田キャンパスにおいて，施設の建設工事などに先立ち，文化財保護法にのっとった埋蔵文化財の発掘調査が実施されるようになってから，半世紀以上が経過した。大量に蓄積されてきたこれらの調査成果とともに，関連するさまざまな研究成果を紹介する「文化財発掘」と銘打ったシリーズ展示も，11 回目となる。このたびは，大学が所在する地域にとっての遺産と呼べるものを考えて，企画をたてた。

これまでも，比叡山の西南麓に位置する吉田キャンパス一帯の歴史については，たびたび展示でとりあげてきたところである。しかし，大学と地続きの地域において，歴史を経ながら現在進行形で営まれているものまでは，視野に入っていなかった。それが，今回遺産として紹介する吉田地区の剣鉾祭礼である。このような，地域の民俗資料をとりあげる展示は初めての試みとなる。

そもそもの経緯は，2021 年度におこなった展示「埋もれた古道を探る」（文化財発掘Ⅷ）にさかのぼる。京の荒神口から近江坂本へ至る古道で，本部構内の地下から平安後期以降の路面変遷が連綿と見つかる白川道（志賀越え道）に焦点を当てた内容であり，その際に，江戸時代の吉田村における白川道や地割，面積や耕作者名などがつぶさに記された館蔵の『山城国吉田村古図』を展観した。このことが，地域コミュニティのなかで古図への関心が高まる契機となり，有志の方々による釈読が進んだ結果，剣鉾にかかわる記載－具体的には，複数の鉾の名称が書かれた区画－があちこち見出されるに至ったのである。それは，「鉾田」と呼ばれているような，それぞれの鉾の祭礼費用をまかなうためにあてがわれた田畑の所在を示すものであった。



吉田南構内の近世遺構（1996 年）
小穴は作物懸架用の柵、大きな丸穴は野壺（肥溜め）跡



時計台前での唐胡麻鉾（とぐるまぼこ）鉾差しの披露
（吉田今宮社神幸祭の巡行・2024 年 10 月 13 日）

この情報を耳にした私のなかでは，現在から未来への継承に心が砕かれている地域の伝統祭礼と，発掘調査で頻繁に遭遇する江戸時代の耕作にかかわる遺跡とが，それらの土地の情報を描いた古図を介して，ひとつに結ばれることになった。そして，地中の過去の遺産が語る地域の歴史は，現在ともつながる存在であり，それを展示で示そう，と思い立ったのである。

具体的には，平安時代から現代までを対象にして，歴史都市近郊としての盛衰を物語る構内からの出土品を選りすぐって紹介するとともに，江戸時代の『吉田村古図』を，剣鉾にかかわる記載の解説とともに再度出展する。あわせて，剣鉾祭礼の何たるか，を視覚的に感じられるような祭具などの実際や映像を配置して，大学があるこの町の歴史と現在を体感できる空間になれば，と考えている。国際的な卓越を目指す大学の足もとを支えてくれている，豊かな地域遺産を味わっていただけたなら，幸いである。

なお末尾ながら，今回の展示にあたり，資料を提供いただいた吉田剣鉾保存会と太元講社，釈読成果の使用を快諾された吉田村古図を読む会それぞれのみなさんには，この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

（文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
助教　伊藤淳史）

第 164 回 レクチャーシリーズ（特別版）
シンポジウム
博物館や地域における 3D データの現在・未来
ワークショップ
博物館や地域における 3D データ取扱のデモンストレーション

開催日：2024 年 12 月 1 日（日）

2024 年 12 月 1 日（日）に，総合博物館北館 3 階講演室において，本博物館の第 164 回レクチャーシリーズ（特別版）として，シンポジウム「博物館や地域における 3D データの現在・未来」を一般公開形式で開催しました。2022 年に改正された博物館法により，博物館には電磁的記録を保管することが求められており，大学や地方の博物館の注目すべき技術として 3D モデルの活用が挙げられています。本シンポジウムは，様々な機関における 3D データの計測・保管・利用状況の現状を報告し，相互の情報交換を目的として開催しました。

まず，公立小松大学次世代考古学研究センターの野口淳さんが，岐阜県，長野県，山梨県といった地方の博物館や教育機関で行ってきたデジタルアーカイブ化の実践例を紹介し，現在の到達点と将来の展望について話してくれました。特に，子ども達に自分でスキャンをさせて「自分の博物館」を作らせる実習は，「見る博物館」から「作る博物館」への発想の転換ともいえる新たな試みとして注目されていました。

京都大学総合博物館の塩瀬隆之さんは，技術史分野で扱う「人工物」を対象とした 3D スキャンにおける実情と問題点を報告しました。光沢などの赤外線反射やガラスなどの赤外線透過素材，人工物ならではの複雑さ，複合素材による異なる赤外線反射率の混在など 3D スキャンが苦手とする対象物やその撮影における問題点と試行錯誤の経験を紹介してくれました。何でも簡単に 3D 化できるというわけではないことを気付かされました。

兵庫県立人と自然の博物館の橋本佳延さんは，植物生体フォトグラメトリの手法を紹介してくれました。葉や花びらのように薄い対象物は 3D 化が非常に難しく，さらに生きている植物は日々少しずつ形が変化します。「写真の精度」と「撮影スピード」という 2 つの相反する要求をクリアーするために，自作の特殊な撮影機器を使用してこの難問をクリアーした経験を紹介してくれました。

千葉県立中央博物館の丸山啓志さんは，私たちの身近にある iPad Pro や iPhone Pro を使用した 3D スキャンの実践例を紹介してくれました。写真から 3D モデルを作成するフォトグラメトリーや，LiDAR（ライダー）と呼ばれるレーザーを用いた 3D スキャンの操作法まで，素人にもわかるように解説してくれました。スナメリの頭骨や展示室を撮影した画像も紹介していただき，役にたったという感想が寄せられていました。


講演者 5 名と司会者

最後に，和歌山県有田川町の荻野慎諧さんが，日本各地の自治体で行ってきた化石の復元模型を用いた地域の活性化活動の実態を話してくれました。断片的な化石の画像だけでなく，デジタルデータを元に欠落している部分を復元して 3D プリンタで作成することにより，全体像を把握できる状態にするという試みです。大きな恐竜化石などのスケール感や意義を伝えるための手法の紹介でした。

レクチャーシリーズの一環であまり宣伝活動をしなかったので，外部の参加者は 16 名ほどでしたが，それぞれの機関における 3D 化作業の問題点に関する具体的な質問がされていました。また，当日は目の不自由な方も参加されていて，そういった方に対する展示手法についての議討論もあり，非常に充実したシンポジウムになりました。

シンポジウム終了後は，休憩を挟んで講演者を中心としたワークショップを開催しました。広い講演室一杯にブースを広げて，それぞれの講演者がスキャンの実践を行い，参加者の質問に答えていました。ステレオ撮影可能なデジタルカメラや 3D データを表示できるメタバース展示場のデモなども紹介され，3D データをとりまく新しい技術体験の機会もありました。博物館における 3D データの取得とその利用方法に関して，互いに情報交換などが期待できるイベントとなったと思います。なお，このシンポジウムとワークショップは，科研費基盤研究 (C)（22K01021，代表者：丸山啓志），と科研費基盤研究 (B)（22H02708，代表者：高井正成）の援助を受けて開催しました。

（総合博物館 教授 高井正成）

総合博物館コレクション研究〈23〉

移管された標本群に眠る無脊椎動物のタイプ標本たち

総合博物館が収蔵する動物学コレクションには様々な出自の標本群が含まれている。1つは本学教養部・第三高等学校由来の標本群で，それら標本群については標本そのもの，そして情報の整理が進み，総合博物館収蔵資料目録第10，12号においてその全容が公開された。他にも，生態学研究センター（旧大津臨湖実験所）から移管された標本群や，理学部動物学教室から移管された標本群がある。言わずもがな，大津臨湖実験所は本邦における陸水生物学を牽引した施設であり，特に明治から昭和に収集された各標本の学術的価値は計り知れない。また，動物学教室移管標本においては，教育目的と思われる様々な標本を確認出来ると共に，駒井卓博士をはじめとした，動物学教室に在籍した教員・構成員が自身の研究に用いた標本を認めることが出来る。したがって，それら移管された標本群だけでも，後生動物の主要分類群ほぼ全てを網羅する実に多様でかつ大量の標本が含まれているのである。

さて，筆者は動物分類学徒の末席を汚すヒル屋であるので，どうしてもそれら移管された標本群を観る最初の視点は，「ヒル類，そして他分類群のタイプ標本（＝学名が紐付く標本）が含まれているのか？」である。残念（？）ながらヒル類の何かしらのタイプ標本というものは，臨湖実験所，動物学教室由来標本群から確認することは出来ない。それは偏に，邦産ヒル類に関する学術的基礎を築き上げたのが丘浅次郎博士であり，それら記載論文のほとんどが，彼が高等師範学校（後の東京高等師範学校）に教授として在籍していた期間に出版されたものだからである。丘のヒル類標本は筑波大学を経由し，現在は国立科学博物館に収蔵されている。一方，臨湖実験所由来のヒル類標本の中には，インド産のものを確認することが出来る（写真1）。これら標本はZoological Survey of Indiaの所長であったThomas Nelson Annandale博士が1915年，琵琶湖調査のため臨湖実験所を訪問したことに由来するものだと推察される。一方他の分類群については，未整理な状態の「タイプ標本」が，移管された標本群にまだまだ眠っていることが判明してきた。そこで本稿では，筆者が標本整理作業中に大津臨湖実験所および動物学教室由来標本群それぞれから見出した「タイプ標本」について紹介したい。

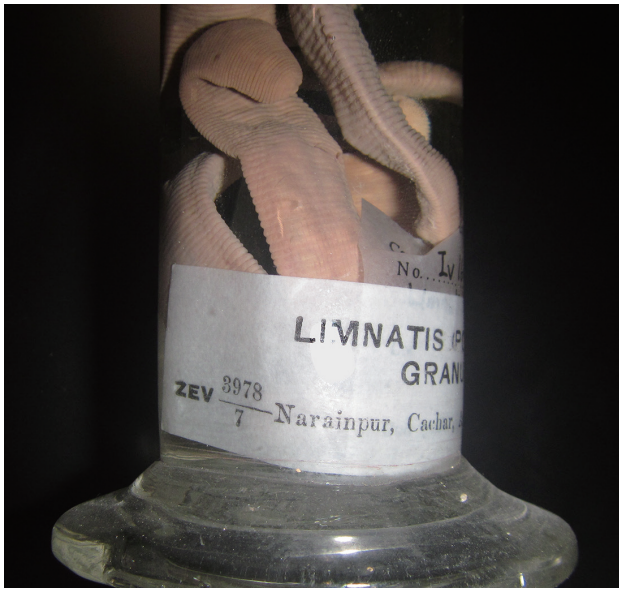


写真1：Indian Museumの標本番号が付与されたヒル類標本（大津臨湖実験所由来標本）



写真2：水生昆虫標本のキャビネット（大津臨湖実験所由来標本群）

大津臨湖実験所由来標本

臨湖実験所由来標本群は，その移管時に整理が行われて総合博物館に収蔵されたため，多くの標本が利用可能な状態である。臨湖実験所由来の無脊椎動物標本群の中には，今西錦司博士が研究したカゲロウ類を始めとした水生昆虫の標本が整理された状態で収蔵されている（写真2）。各種のタイプ標本を含むそれら標本群は，各分類群の専門家によって適宜調査，再評価されており，今後も多くの成果に繋がる資料として研究が進むであろう。

一方，臨湖実験所から移管されたものの中には，年代物の新聞紙で包まれた木箱の中に収められた無数の未整理標本が存在している（写真3）。筆者は気合いが足らず，その概要すら把握出来ていないのであるが，少し中身を確認しただけでも，地下水生ヨコエビ類の1種である，ヤマトメナシヨコエビ *Procrangonyx japonicus* (Uéno, 1930) のタイプ標本が見出される具合であるか



写真 3：未整理状態の各標本（大津臨湖実験所由来標本群）

ら（Nakano et al. 2018. Zootaxa 4532: 86–94），未だ多くのタイプ標本が眠っていることは想像に難くない。例えば，エゾヨコエビ *Sternomoera yezoensis* (Uéno, 1933) はそのタイプ標本の所在が現在に至るまで不明であるが，筆者がヨコエビ類の分類学を専門とする広島大学の富川光教授と調査したところ，記載論文において言及された標本と同じタイミング，同じ地点で採集されたエゾヨコエビの標本を発見することが出来た（写真 4）。

ヤマトメナシヨコエビとエゾヨコエビは共に，上野益三博士によって記載された甲殻類である。上野は 1929 年臨湖実験所に着任して以降，京都大学を退官する 1963 年まで同実験所で研究を続けた。上野の業績が分類学に留まらないことは周知の通りであるが，分類学者としては，鰓脚類をはじめとした甲殻類や他陸水環境に生息する分類群において，数多くの新種記載を行った。従って，上野が記載し，かつタイプ標本の所在が現在に至るまで不明である種については，大津臨湖実験所由来の未整理標本に当たることが，一考に値すると思われる。

理学部動物学教室由来標本

動物学教室由来標本群については，魚類標本の一端が，先のニュースレターに紹介されている（松沼 . 2022. 総合博物館ニュースレター 56: 4–5）。動物学教室由来の無脊椎動物標本は，海産無脊椎動物の比率が高いように見受けられ，それらは高次分類群毎大まかに仕分けされている。筆者が簡単に確認した限り，駒井が記載した分類群のタイプ標本が認められたが，加えて，椎野季雄博士の記載した寄生性甲殻類標本が見出された。椎野は 1927 年から 1930 年まで本学理学部に在籍し，主に駒井（旧動物学第一講座）や岡田要博士（旧動物学第三講座）の指導を受けた後，1931 年，助手として瀬戸臨海



写真 4：エゾヨコエビ標本とラベル（大津臨湖実験所由来標本）

実験所に着任，1936 年まで在籍した。

今回確認出来た椎野の標本は，甲殻類に寄生する等脚類の一群，エビヤドリムシ類からなり，幾つかの標本については保存液が蒸発してしまっていたが，概ね良好な保存状態を維持していた。全 41 点の内 10 点強のラベルに「タイプ」と記述があり，瀬戸臨海実験所周辺で採集され，本学理学部紀要において 1937 年に記載された種（写真 5）の他，パラオより得られた標本に基づいて 1942 年に記載された種などが確認出来た。これら標本については，その情報を整理して標本そのものを利用可能な状態にせねばならず，それは筆者に課された宿題である。その上で今後専門家による調査により各種の分類学的地位の明確化や改訂に繋がれば，望外の喜びである。

大津臨湖実験所由来，そして理学部動物学教室由来標本群の学術的価値は疑いようが無い。しかしながら一方，整理されている臨湖実験所由来標本群ですら，実は，その実態解明にはほど遠いのが現状である。眠りについた標本達が再び日の目を見ることが出来るよう，移管された標本群を少しずつでも解きほぐしていきたい。

（理学研究科 准教授　中野隆文）



写真 5：エビヤドリムシ類タイプ標本
（理学部動物学教室由来標本）

京都大学総合博物館収蔵資料目録 第 10 号 教養部・第三高等学校由来動物標本 ; 第一部 脊椎動物標本（KURENAI：http://hdl.handle.net/2433/282750）
京都大学総合博物館収蔵資料目録 第 12 号 教養部・第三高等学校由来動物標本 ; 第二部 無脊椎動物標本（KURENAI：http://hdl.handle.net/2433/287608）

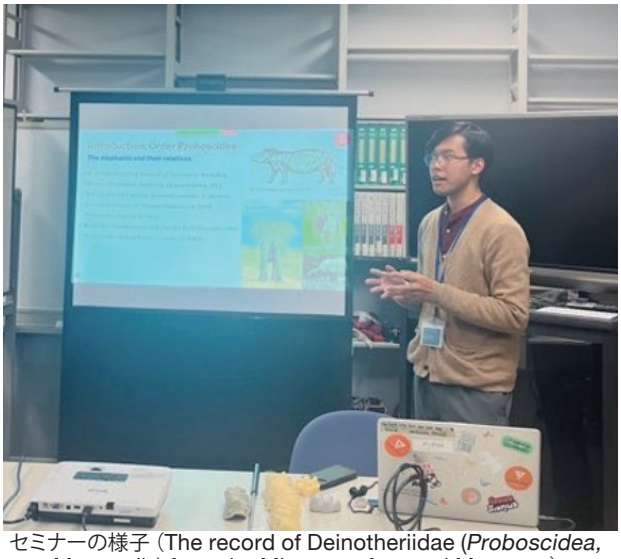
総合博物館でのインターン

Chaisuwan Katakrit （インターン学生）

滞在期間：2024 年 11 月 14 日（木）～ 2025 年 1 月 14 日（土）

総合博物館のインターン学生として，タイ国プリンスオブソンクラー大学生物科学部の学部生であるチャイスワン・カタクリート氏が２ヶ月間の予定で来日しました。哺乳類化石を対象として研究したいということで，レプリカの作り方や３D スキャンの手法を学び，高井研究室に所蔵されていたミャンマーの長鼻類化石の研究を行いました。特に，ミャンマー中部のチャウンター地域の中期中新世末のペグー層最上部から見つかっていたデイノテリウム科 Deinotheriidae のゾウ化石の同定を行い，ミャンマーのデイノテリウム科化石は全てプロデイノテリウム属 *Prodeinotherium* に含まれ，その中に２つのタイプがあることを発見しました。タイに帰国後に，この結果を論文化して専門誌に投稿する予定です。

（総合博物館 教授　高井正成）



セミナーの様子（The record of Deinotheriidae (*Proboscidea, Mammalia*) from the Miocene of central Myanmar）

I am Katakrit Chaisuwan, an undergraduate student from the Division of Biological Science, Prince of Songkla University (PSU), Thailand. I stayed in Kyoto for 2 months as an intern of Professor Masanaru Takai at the Kyoto University Museum (KUM). During my stay in Kyoto, I was very impressed with many things in Kyoto as an old capital of Japan, the beautiful places, temples, and shrines fascinate me. For the internship project, I'm interested in mammalian paleontology and the prehistoric mammals in Southeast Asia. I focused on the fossils of the Proboscidea, especially Deinotheriidae, an extinct elephant, which was distributed in central Myanmar in the late Neogene period. Deinotheres are very interesting proboscideans, because they had a pair of down-curved tusks just from a lower jaw unlike the recent elephants. In addition, they had the vertical tooth replacement style, differing from the horizontal tooth replacement seen in the later proboscideans.

Deinotheres consist of two major genera: small-sized *Prodeinotherium* and large-sized *Deinotherium*. The Myanmar-Japan Joint Expedition team, led by Professor Takai, discovered many proboscidean fossils including deinotheres from various late Neogene sites in Myanmar. My work at the KUM is to identify the species of Myanmar deinotheres by considering several morphological characteristics that appear on the Myanmar deinotheres teeth. I compared the Myanmar specimens with other deinothere fossils discovered from Asia, Europe, and Africa. As the result, I found that there are likely two kinds of the genus *Prodeinotherium* in Myanmar. At present, I provisionally identified them as *Prodeinotherium* cf. *P. pentapotamiae* and *Prodeinotherium* cf. *sinense*. To make a final decision, I have to get more comparative data from the previous works, and make direct comparisons based on replicas and 3D data, which was obtained at the KUM.

My two-months internship at the KUM provided me so many mammalian paleontological skills which useful for my graduate study to be a paleontologist in the future. I would like to express my gratitude to Professor Takai for his kindness and the skills he provided me. Thank you to Professor Motokawa Masaharu and all my colleagues at the KUM for supporting me and my work during my internship. This is one of the best experiences of my life.

ありがとうございました。

(CHAISUWAN Katakrit)

総合博物館でのインターン

Sebastian Cock （短期交流学生）

滞在期間：2025 年 1 月 9 日（木）～ 2 月 21 日（金）

大学院教育支援機構の「Kyoto University Short-Term Academic Research（KU-STAR）Program」では，オーストラリア・メルボルン大学から 4 人の学部学生を短期交流学生として受け入れました。総合博物館では，鳥類生態学の研究を行うセバスチャン・コック氏を受入れました。京都市動物園と鴨川河川敷で鳥類の行動を野外調査により観察しました。鴨川の野生個体と動物園の飼育個体での行動の違いを明らかにしました。また，総合博物館での鳥類標本も閲覧しました。KU-STAR プログラムの活動を通じて、京都の文化や自然を学び、京都大学での充実した日々を送りました。

（総合博物館 教授　本川雅治）



野外でのアオサギ（*Ardea cinerea*）の観察

I am Sebastian Cock, an undergraduate student from the University of Melbourne (UoM) studying environmental sciences with a specialization in animal conservation and ecology. I came to Kyoto as a part of a special research program called the Kyoto University Special Academic Research (KU-STAR) Program, where students from UoM would spend around 2 months engaging in graduate research in specialized labs catered to their interests. For my research, I was assigned to Professor Masaharu Motokawa at the Kyoto University Museum and Professor Craig Barnett at the Graduate School of Science.

My research involved identifying the behavioral differences between free-living and captive-wading bird species. I was specifically interested in whether captive birds would exhibit some manners of stereotypies, repetitive and functionless abnormal behaviors usually found in captive animals. The birds I selected for my research were the grey heron (*Ardea cinerea*) found in the Kamo River, the northern bald ibis (*Geronticus eremita*), and the red-crowned crane (*Grus japonensis*), with the latter two being kept in Kyoto City Zoo. Throughout two weeks, I would spend every morning visiting these two locations, observing the potential behaviors of my selected birds and recording the duration of each behavior.

My results showed significant differences in the duration herons, ibises, and cranes would spend moving, eating, and resting. Herons would spend most of their time at rest, while ibises and cranes were found to be more energetic and feed themselves more frequently. However, comparative studies such as these require more long-term time investment and variables such as age and sex to be investigated, and with enough research, animal behavior studies such as this can be used to help improve the conditions of captive environments.

My experience for these past two months has been wonderful. The freedom to go out and explore the beautiful scenery and traditional locals all over Kyoto, all while researching is an experience I'll always look back on. My time here has given me greater guidance on my future career path in ecological sciences and ignited my passion for the subject. Thank you to my supervisors as well as my colleagues for making my short time in Kyoto the best it could be.

（Sebastian COCK）

子ども博物館だより〈7〉

VR で地質学を学ぶ

VR とは Virtual Reality（仮想現実）の略で，コンピュータの映像や音声などを現実世界のように体験することを指します。VR ゴーグルをつけてゲームをしたり，遠く離れた外国にいる気分を味わったり，皆さんも一度は体験してみたいと思ったことがあるのではないでしょうか？

子ども博物館を訪れた皆さんには，VR を通じて地質学の面白さを知ってもらいたいと考えています。地質学とは岩石から地球の歴史を読み解く学問であり，京大博物館にも化石や鉱物に関する試料が多く展示されています。しかし，そもそも地質や岩石には馴染みのない人もいるはずです。そこで，まず地質学の一歩手前で皆さんの興味を引くきっかけのとして，VR は非常に効果的だと考えています。また，地質学の基礎となるのは野外における岩石の観察です。地質学を専門とする人たちの多くは，日本全国山の中，あるいは海の上，またある時には国境を越えて調査に出かけます。地質学とはどういうものなのかを皆さんに実感してもらうには一緒に調査に出かけるのが一番ですが，それはあまりにも大変です。ただし，VR ゴーグルを使うことで，野外調査のように海岸を歩いてそこに現れる岩石を観察すれば，そのような問題も瞬時に解決です。



VR の中で海岸を歩く様子

子ども博物館で知って経験した地質学の世界の「面白かった！」を持ち帰ってもらえるよう，これからも励んでいきたいと思います。

（理学研究科 修士課程　佐藤瑠晟）

きょう、いくつのお地蔵さんとすれ違いましたか？

表題に答えられる人は，まず存在しないだろう。それだけ，お地蔵さんは京都の日常に溶け込んでいるといえる。

人文地理学を専攻する私にとって，子ども博物館にはいくつかの困難が存在した。第一に，多くの子どもたちは化石や生物の展示をめあてに来館する（古地図展を訪れた十数年前の私のような小学生は少数派なのだ…）。第二に，館内で完結させなければならない（地理学は歩いてなんぼの学問なのに…）。以上を克服するべく，広範な興味関心に結び付けられるとともに，家に帰った後も応用できる企画を目指してきた。

そこで，通学路で目にすることがあり，昔話を通じても「あたりまえ」な存在である，お地蔵さんに白羽の矢が立った。具体的には，あるお地蔵さんの写真を提示し，そこに行ったつもりになって，簡単な調査記録とスケッチをとってもらう企画を実施している。小難しく聞こえるが，ひらがなを書く練習にもなるということで，積極的に参加してくれている。調査記録を残すことは，フィールドノートや実験ノートといった形で，その子どもが興味を持つ自然科学系の分野にも応用できることを伝えている。また，帰り道に自分の目と足で，お地蔵さんを数えてみるように勧めることで，現地調査の補完をしている。実際，私の企画を参考に，自宅周辺のお地蔵さんを調査し，自由研究にまとめてくれた参加者もおり，ありがたい限りである。

時折，年配の方にも興味を持っていただくことがある。その際には，ご自身の経験について，即席の聞き取り調査を実施している。それらのエピソードは，すぐさま企画に反映させていただき，子どもたちに伝えている。そういった話をすると，「今度，近所のおばちゃんにも聞いてみようか」といった言葉が自然と参加者の中から出てくる。

毎回，締めの言葉として，身の回りに「あたりまえ」にあるもの（お地蔵さん・鴨川・かまきり etc）でも，調査を尽くすことで，研究につなげられる可能性があることを伝えている。私の企画が，そんな研究の第一歩につながれば幸いである。

（文学研究科 修士課程　宰川玲）

研究資源アーカイブ通信〈32〉活動報告(2024 年 2 月 ~2025 年 1 月)

2023 年度

2 月 3 日～ 4 月 7 日：明石市立天文科学館「太陽系のお天気展」に，「宮本正太郎資料：火星スケッチ，1955–1976」「海老沢火星図，1957–1959」画像提供

2 月 29 日：田中淡『中国建築と日本（田中淡著作集 3)』(中央公論美術出版)に，「田中淡建築庭園写真 , 1967–2003」画像提供

同日：NHK ブラタモリ セレクション No. 162「奈良・飛鳥――なぜ飛鳥は日本の国の礎となったのか？」に，「京都帝国大学文学部考古学教室ガラス乾板写真：石舞台古墳発掘 , 1933–1935」画像提供

3 月 15 日：研究資源アーカイブ運営委員会（第 26 回）開催（次年度事業検討，研究資源化プロジェクト 2 件新規採択，1 件継続）

3 月 20 日：『歴史道』第 32 号（朝日新聞出版）に，「京都帝国大学文学部考古学教室ガラス乾板写真：石舞台古墳発掘，1933–1935」画像提供

同日：小田部胤久＋宮下規久朗『西洋の美学・美術史』(放送大学教育振興会)に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料 , ca. 1920–2004」画像提供

3 月 29 日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第 60 号に，「研究資源アーカイブ通信〈29〉活動報告（2023 年 2 月～ 2024 年 1 月)」掲載

2024 年度

4 月 1 日：明石市立天文科学館『星空のレシピ』第 368 巻に，「宮本正太郎資料：火星スケッチ，1955–1976」画像提供

同日：放送大学「西洋の美学・美術史（24)」に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料 , ca. 1920–2004」画像提供

5 月 15 日：平塚桂「住み継ぐ。―衣笠山の家」(『BRUTUS』第 1007 号)に，「増田友也建築設計関係資料 , 1930–1984（主年代 1950–1981)」画像提供

6 月 3 日：「田中正武研究資料 , 1929–1997」公開

6 月 12 日：百周年時計台記念館にて，「田中正武研究資料 , 1929–1997」記者説明会開催



6 月 20 日：齋藤歩「京都大学研究資源アーカイブにおけるジャパンサーチとの連携」(Japan Open Science Summit 2024）に，「福井謙一研究資料 , 1936–1988（主年代 1940–1982)」画像提供

6 月 20 ～ 22 日：「京都大学コムギ遺伝資源――田中正武博士が残した植物探索の記録」(NBRP・コムギ，農学研究科)に，展示実行委員として協力（齋藤，平澤）

7 月 5 日～ 8 月 26 日：大阪歴史博物館特別展「難波宮発掘開始 70 周年記念 大化改新の地、難波宮――古代日本のターニングポイント」に，「京都大学人文科学研究所写真：阿武山古墳調査 , 1934」画像提供

7 月 7 日：『読売新聞』(朝刊)に，「京大元教授・田中さん 小麦野生種 採集の足跡 ノート、写真 ネット公開」掲載

7 月 29 日：研究資源アーカイブ運営委員会（第 27 回）開催

8 月 20 日：髙井たかね＋齋藤歩「建築アーカイブの現在⑧：京都大学研究資源アーカイブ」(『建築雑誌』第 139 集第 1791 号)に，「田中淡建築庭園写真 , 1967–2003」画像提供

8 月 21 日：『京都新聞』(夕刊)に，「京大 故田中正武教授 コムギ博士の探究 オンライン公開 世界中の種子 記録ノートなど」掲載

8 月 30 日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第 61 号に，「研究資源アーカイブ通信〈30〉アーカイブズと私 (6) 寺内良平先生に聞く『田中正武研究資料 , 1929–1997』(聞き手：齋藤歩)」掲載

9 月 2 日，5 日：2025 年度実施分「研究資源化プロジェクト」説明相談会（オンライン）開催

9 月 30 日：茨木市立文化財資料館『茨木のキリシタン遺物――信仰を捧げた人びと』(第 4 版)に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料 , ca. 1920–2004」画像提供

9 月 30 日～ 11 月 2 日：帝塚山大学附属博物館企画展示「眠具――眠りの道具と文化」に，「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査 , 1934, 1987」画像提供

10 月 5 日：西連寺匠「睡眠の道具と民俗」(帝塚山大学附属博物館市民大学講座)に，「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査 , 1934, 1987」画像提供

10 月 28 日：工学研究科にて調査

同日～ 31 日：東京文化財研究所にて「文化財保存修復に関するワークショップ――写真の識別と保存について」受講（上羽）

11 月 2 日：牟田口章人「英雄は同じ夢を見る！？――曹操と藤原鎌足の玉枕」(帝塚山大学附属博物館市民大学講座)に，「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査 , 1934, 1987」画像提供

11 月 21 日：医学研究科にて調査

11 月 26 日：「増田友也建築設計関係資料 , 1930–1984（主年代 1950–1981)」公開

11 月 30 日：BS11「偉人・敗北からの教訓」に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料 , ca. 1920–2004」画像提供

12 月 6 日：牟田口章人「阿武山古墳で出土したのは「大織冠」だった！」(月刊『歴史人』2025 年 1 月号)に，「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査 , 1934, 1987」画像提供

12 月 25 日：『京都大学総合博物館ニュースレター』第 62 号に，五島敏芳「研究資源アーカイブ通信〈31〉『検索手段』雑考」掲載

2025 年 1 月 4 日：塚田健「天文外史」(月刊『星ナビ』第 26 巻第 2 号)に，「宮本正太郎資料：火星スケッチ，1955–1976」画像提供

1 月 7 日：加藤直子「仏教建築の東と西」(『シルクロード研究論集 第 2 巻 仏教東漸の道 西域・中国・極東篇』)に，「田中淡建築庭園写真 , 1967–2003」画像提供

（総合博物館 事務補佐員 内山美喜子）

総合博物館日誌（2024 年 11 月～ 2025 年 2 月）

展示

▶ 2024 年度企画展「宇宙からの手紙
隕石の発見からはやぶさ2の探査まで」
2024 年 7 月 24 日（水）～ 11 月 3 日（日）
［関連講演会等］＊対面形式での開催
2024 年 11 月 2 日（土）
総合博物館南館 1 階ミューズラボ
講演会「宇宙からの手紙」
竹之内惇志（京都大学総合博物館）
▶ 特別展「蝶に会える日
― 村田泰隆コレクション展 III 日本の蝶」
2024 年 11 月 20 日（水）～ 12 月 15 日（日）

子ども博物館・活動報告

実施回数：12 回
参加者数：子ども 181 人／中高生 7 人／
大人 209 人
スタッフ（のべ）：44 人

レクチャーシリーズ

▶ 第 164 回　2024 年 12 月 1 日（日）
シンポジウム「博物館や地域における 3D データの現在・未来」
講演者：荻野慎諧（和歌山県有田川町）
塩瀬隆之（京都大学総合博物館）
高井正成（京都大学総合博物館）
野口淳（公立小松大学）
橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）
丸山啓志（千葉県立中央博物館）

博物館セミナー

＊対面とオンラインによるハイブリッド開催
▶ 第 133 回　2024 年 11 月 15 日（金）
骨にみる産む・産まれるための戦略
川田美風（京都大学大学院理学研究科）
▶ 第 134 回　2024 年 12 月 13 日（金）
化石が語る植物と節足動物の関係史
今田弓女（京都大学大学院理学研究科）

イベント

▶ 第 19 回京都大学ホームカミングデイ
［オンサイト開催］
2024 年 11 月 2 日（土）　観覧料無料
［オンライン開催］
2024 年 10 月 1 日(火)～ 2025 年 3 月 31 日(月)
▶京都千年天文学街道 第 44 回アストロトーク
2024 年 11 月 9 日（土）
主催：認定 NPO 法人花山星空ネットワーク
共催：京都大学大学院理学研究科附属天文台，
京都大学総合博物館
▶ 大地は語る展 2024 地球探検隊！！
2024 年 11 月 17 日（日）
展示・体験コーナー，講演
主催：大地は語る展 2024 実行委員会
共催：京都大学総合博物館
▶ ワークショップ「博物館や地域における 3D データ取扱のデモンストレーション」
2024 年 12 月 1 日（日）　総合博物館北館 3 階講演室

協力イベント等

▶ 関西文化の日
2024 年 11 月 16 日（土）・17 日（日）
観覧料無料
▶ 京都市 留学生優待プログラム
「留学生おこしやす PASS」
2025 年 1 月 1 日（水）～ 2 月 28 日（金）
▶ 第 28 回京都ミュージアムロード
2025 年 1 月 22 日（水）～ 3 月 16 日（日）
▶ 京都マラソン 2025
2025 年 2 月 16 日（日）

展示協力（学術標本資料の貸出）

▶ 世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ（1 点）
「企画展 Save the 淡水魚～未来へつなぐ水辺の宝～」
2024 年 12 月 14 日（土）～ 4 月 13 日（日）
▶ 公益財団法人千葉市教育振興財団（4 点）「令和 6 年度特別展 貝と人」
2025 年 2 月 3 日(月)～ 2025 年 3 月 16 日(日)

総合博物館の刊行物

『2024 年度特別展　蝶に会える日－村田泰隆コレクション展 III 日本の蝶』
2024 年 11 月 19 日発行

入館者数

8,954 人（うち特別観覧　22 団体，815 人）



蝶に会える日 図録表紙

京都大学総合博物館ニュースレター　ISSN 2758-0784
第 63 号　2025 年 3 月 28 日 発行
編集・発行：京都大学総合博物館
〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
電話：075-753-3272　FAX：075-753-3277
Email: info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp
https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/
※ニュースレターは，京都大学学術情報リポジトリ KURENAI でも公開しております。